

おわりに

森 武 磨

本書では、洞海湾若松港における船上生活者の歴史の変容について、おもに舢舨と機帆船での船上生活者の暮らしからそれぞれ一人ひとりのライフヒストリーとしてまとめながら、全体史としてのオーラルヒストリーとして、明らかにしようとしたものである。

もちろん、「はじめに」で述べたように、それぞれの章が独立性をもって叙述されており、論旨・文体とも統一されていないのだが、「日本近代の発展を底辺で支え、歴史に記録され、記憶されることもない名もない人たち」、「ほんの芥子粒みたいな短い期間に、ただ頭をもたげるだけの人たち」の生きざまを後世の記録として残しておきたいという、われわれ共同研究執筆者の思いが少しでも伝わっていれば幸いである。

とくに本書の意味は、日本近代をエネルギー面から支えた北九州筑豊炭田の歴史を、従来の石炭産業史や炭鉱労資関係史でなく、石炭積出港として発展した若松港の舢舨・機帆船の船上生活者、さらには「ごんぞう」といわれた港湾荷役労働者の生活の記憶を発掘、記録することによって、近代炭鉱史の流通過程に携わる人々の生活史を通して、その歴史像を豊富化することであった。そのために、このような史料のほとんど残らない歴史を明らかにするべく、人々の記憶の再生としてのオーラルヒストリーの方法を意識的に追求し、また図書館や個人が所有する写真資料を収集し、それらを歴史叙述に生かしたことであろう。

第1章の「洞海湾の変遷と港湾輸送」では、舢舨の生活者が身につけた、忘れ去られようとする技術の話や、荷役作業の時に海に落ちた「カイボッタン」という石炭拾いの話、北樺太から沖縄まで渡り歩く

アンコ労働者、任侠道を身にまとう「ごんぞう」、文学・詩を志す「ごんぞう」などの話を通して、多彩な船上生活者と港湾荷役労働者像が見えてくる。

第2章の「洞海湾若松港における船舶輸送」では、船大工から機帆船修理に生涯をかけた話、輸送用の小さな機帆船で、玄界灘の荒海を対馬に渡る船上生活者の話から、嵐の瀬戸内海をレーダーのない時代、頭に叩き込んだ海図と灯台だけを頼りに乗り切る機帆船夫婦のたくましが、よみがえる。

第3章の「洞海湾若松港における港湾荷役業」では、「ごんぞう」の船への石炭運搬の職人的技術、熟練技を習得した「ごんぞう」の技術伝習と賃金の決定構造など、仲仕の生々しい労働実態が聞き書きから伝わってくる。

第4章の「船上生活者の暮らし」では、船上で炊事する主婦の肩にとまる微笑ましい伝書鳩の写真から、緊急連絡を必要とする船上生活の厳しさが伝わる。また船上生活の水の貴重さ、「ウロさん」といわれる日用雑貨を伝馬船で売り回る船商人が、船上生活者を支えたこと。さらに大手の日本郵船、大阪商船、山下汽船などの食料を大量に販売する「船食」業者の活躍など、従来の歴史では記録されることのない、海の生活者の実像がいきいきと描かれる。

第5章の「船上生活と子供たち」では、揺れる船上で熱湯をかぶり火傷する子供たち、船上で遊ぶ子供たちの姿や海に落ちて亡くなる子供たちの悲劇が胸に迫る。このような船上生活の子供たちを船上の危険から救い、義務教育を継続させるため、陸上の寄宿舍・若松児童ホームを設置し、それによる船上生活の両親との別れなど、近代化は子供たちの生活にも大きな変化をもたらした。さらに児童ホームに収容された子供たちを懸命に支える保育士の活動

が、今はじめて語られる。これら貴重なそれぞれの体験談は、忘れ去られつつあるかつて洞海湾若松港で暮らした人々の多様な生きざまを、現在に伝えている。

以上のように、若松洞海湾の船上生活者の歴史は、石炭輸送として日本近代産業の底辺を支えるばかりでなく、これらの船上生活の人々の生活史を通して、時代ごとの固有の歴史が一人ひとりの記憶に刻み込まれている。これが日本の近代から現代への歴史の一断面である。ここから、私たちは新しい近代史を再発見できるのではないだろうか。